

「山形の自然・ひとに魅せられて
— 地域をつくる人を育てる・飛島14年間の活動から—

東北公益文科大学 教授
吳尚浩（ご なおひろ）

山形へ、そして地域で「公益」を実践する「ひと育て」をめざして

2001年、東北公益文科大学の開学を機に庄内に移り住み、はや14年目を迎えた。この地の自然と人の豊かさに魅せられ、本物の土と人の心につながり、本当の意味で故郷と言えぬ地に出会ったことを心から感謝している。

この間「多様な主体の共創による自然の循環的利用・保全と地域づくり」を通じて「公益社会のデザインと実践」に取り組んできた。庄内地方では「島づくりと海ごみ問題」「海岸林保全」「生き物と共生する農と食」「いきいきと学ぶ教育」を実践。いずれも他地域や全国的な制度、海外に影響を与える先進事例に育っている。人と自然の共生の分野では、山形のような地こそ「中心的な場」であり、特に山、川、平野、海、島が揃い「共生の文化」が根づく庄内こそ、全国や世界に発信力を持つ。背景には、危機を乗り越え得る潜在的な地域力があり、これこそが山形の方であり、魅力である。

私は、公益とは「"他者（自然や人々）の存在"を尊重し、"他者への思いやり"と"他者とのつながり・調和"を大切に作る心、それにもとづく思考と行動である」と考えてきた。公益を求める「心」のあり方、実現する具体的な「方法」論と「行動」力の三つをバランスよく、実践的に学ぶことが大学での教育の目標である。

本稿では、多くの若者の生き方に影響を与えた島の地域づくりや海ごみ問題への取り組みから「地域をつくるひと育て」を考えたい。

「海ごみ問題」解決への取り組みから学ぶ「公益社会のデザインと実践」

きっかけは、開学した年の飛島合宿。学生と共に島の自然や暮らしの豊かさに感動すると同時に、西海岸に膨大に堆積した"非公益的"な海ごみと過疎高齢化の厳しさを目の当たりにした。島本来の美しい浜を取り戻し、地域再生につなげたい。島の自然や暮らしの原風景のすばらしさを伝えたいとの"公益の実現"への想いが生まれた。

同年より飛島クリーンアップ作戦が開始し、翌02年からは、県、市、NPO、島民、大学、業界団体、海上保安部等が実行委員会を組織し、市民ボランティアを募集する年に一度のイベントが定着。ここ数年、本来の美しい砂浜が見えるようになっていく。毎年多数の学生が参加し、事前の準備段階から大きな役割を果たしてきた。

しかし、美しい浜はボランティアだけでは実現できず、内陸の河川や海外から発生するごみの発生抑制が必要である。03年には、全国的なNGO（現、一般社団法人JEAN）が呼びかけ第一回「海（当初は離島）ごみサミット」を飛島と公益大で開催、現在に続いている。同サミットは、地域・NGO発信で、同じ課題を抱える各地域の行政・NPO、国の関係省庁、研究者、海外からの参加者等が一堂に会す場だ。回収作業に共に汗を流し、現場から課題や公益的なビジョンを共有し、問題解決の道を探る役割を果たしてきた。

長年の提言が、超党派の国会議員による立法へ実り、09年7月に「海岸漂着物処理推進法」が国会で成立し、責任の明確化や発生抑制へ向けての法律が誕生。国の制度を整備し、国際間の解決の動きがあつてこそ、地域での取り組みが実を結ぶことになる。

公益大を会場に、国際会議や学会・シンポジウムが開催され、全国の海ごみサミットに参加する機会もある。学生にとっては、海ごみ拾いから、地域・国・国際間の様々なレベルの課題解決まで「公益」を肌で学ぶ格好のテーマといえる。

しまを元気にする — 本来の美しい地域と自然の未来を紡ぐ

飛島では海ごみ問題から、様々な応援団の活動が活発になり、島づくりへの関心が高まっている。もともと島民には「三つの集落それぞれの浜」と認識されていたが、外部者が関わり「飛島の海岸」という意識が生まれた。さらに、ごみを回収した海岸を住民の手で島本来の景観を取り戻す「トビシマカンゾウ保全活動」が生まれ、「住民の主体的な発想や行動を核とし、地域資源を持続可能な形で活かす地域づくり」である「内発的地域づくり」の象徴的活動となっている。

また、07年の海ごみサミット・佐渡会議を機に、佐渡・粟島（新潟県）、飛島において年に一度、自然資源を活かした島づくりを学び合う「三島交流会」が開始。三島を結ぶ観光航路や、粟島でもクリーンアップがはじまるなど、海の道を通じた交流・学び合いが盛んである。

11年には、島民、応援団（大学、NPO等）、行政（県、市）が共に島の未来ビジョンを語り、合意形成から事業の実施に取り組む「とびしま未来協議会」（以下、協議会）が発足し、多様な主体による島づくりの先進事例として注目されている。

かねがね、島民一人ひとりには意欲的なアイデアがあるにも関わらず、合意形成の場の弱体化で実現が阻まれ、島の未来を話し合う場づくりの必要性を提唱してきた。しかも、高齢化が進む地域では、アイデアの活性化と実現のために応援団も加わり、行政の後ろ盾を得る必要がある。その公的な場が協議会であり、井戸端会議的な場が「しまかへ」（しまCaféとして11年にスタート。島民が「しまかへ」と発音することから島らしい呼び名に）である。それをサポートする形で公益大の教員・院生を中心に「とびしま未来研究会」（以下、研究会）が07年に発足し、島のビジョンづくりに力を果たしている。事務局として協議会を支えるNPO法人パートナーシップオフィスの存在も大きい。

その成果として、13年に発表された今後10年間の「離島振興計画」策定の過程で、島民（協議会）案をまずまとめ、市・県に提案することで、飛島では従来にない島民主体の計画を作成した。島民の声を聞く仕組みすらない島が多数ある中で、島民主体の島づくりの第一歩を実現でき大変喜ばしい。

まさに、研究会が提唱してきた「利潤追求目的でもなく、単発的な活動でもない、公益的かつ継続的に地域づくりの課題に関わろうとする人々、グループ、もしくはネットワーク、またはそこから生み出される力」である「公益的な民の力」の果たす役割の実際的な姿が現れてきたといえる。

学生たちの活動 — しまから学び、そして実践する「公益」

その中で学生たちは、02年からのクリーンアップや03年の「離島振興計画基礎調査」への参加等を機に、ボランティアガイド、自然体験活動のサポート、04年からは「飛島音頭・小唄の復活」と応援団が島民に感謝を伝え交流する「天保そば・ごどいも収穫感謝祭」の運営、交流・共創拠点「しまの家」の運営（観光案内、ガイド、ギャラリー・サロンづくり、ブログによる情報発信、08～10年）、全国の島づくり先進地との交流（08年からは、13年に「地域再生大賞」を受賞した沖縄・伊是名島の「NPO島の風」と交流）等を行ってきた。

最近では、09年から農商工連携（JA山形農工連、県漁協、公益大）で「とび魚だしプロジェクト」が発足。学生が「とび魚だしめんつゆ」の商品開発、販促に関わり、島の暮らしや原風景、手間暇をかけた伝統文化の現代的意義を合わせて消費者に発信している。

その一環で、毎年7月初旬に「とび魚焼干し」体験をするようになり、漁師の暮らしの場で交流する中から、島民との深い関係が生まれた。学生の関わりは、漁師と漁協との関係にも良い影響を与え、島民には「自分たちのとび魚を使った島の特産品」として認識されるようになってきた。さらには、江戸時代の蕎麦の種を復活させ飛島で純粋種を育てる「天保そば」と「とび魚だしのそばつゆ」をセットにした、「飛島や」というお土産品も協議会の企画で生まれた。

今年度は、公益大が昨年度から採択された文科省「地（知）の拠点整備事業」の一環で、島の魅力発信や観光基礎調査、広域観光、そして防災計画づくりに取り組んでいる。

ところで、学生の島に関わる思いは、06年の学生まちづくりサミット（公益大開催）の発表の中で、次のようにまとめられた。(1)「愛」こそ地域づくりの原点：幾度となく島に通うことで、島の人々と自然との心のつながりができました。「島が好き！」という気持ちが、私たちの活動の原動力です。(2)学生の活動はみんなの潤滑油：目的主義になりがちな社会人の活動の中で、学生が純粋な思いで活動することは、みんなの活動をつなげる役目を果たしています。(3)みんなの思いを聞くのも私たちの役割：お茶飲み話をしながら島をめぐり、島民や自然の本当の声を聞き、伝え、実現していきたいと願っています。(4)信頼関係の上にすべてが花咲く：さまざまな方との交流や自然と向き合うことで信頼関係が築かれ、活動が思いがけず良い方向に発展します。(5)「必要性のある活動、役に立っている実感のある活動」と「楽しさ、よろこび、感動」が活動の両輪です。(6)多様な主体の協働、そして地域から全国、海外との協働が元気の源：学生活動の枠を越えて、島民や島の応援団、国内外のさまざまな活動と響き合うことが、この活動のもう一つの魅力です。

しまに魅せられて — 移り住む若者たち

島で活動した多くの卒業生がそれぞれの地域で活躍し、今まで私の研究室から4名の学生が移住した。

飛島出身の3期生、渡部陽子さんがUターンし「しまかへ」店长、協議会スタッフとして活躍、昨年度卒の遠藤元一さんが農的暮らしをめざしIターン。また、大学院で学んだ1期生の林久美子さんが、栗島に地域おこし協力隊として移住、エコツアーと直売所を担当。宮城県田代島では、5期生の北澤隆行（ルビ：たかぎ）さんが漁業を営み、震災時に大きな役割を果たした。

飛島ではこの10数年で新たな島民を受け入れる雰囲気醸成され、また島に住みたい気持ちを若者の中に育み、ここ数年、飛島に2、30代の若者が移住しはじめている。中でも合同会社「とびしま」や任意団体「飛島ロマン」を立ち上げ、島づくりに積極的なメンバーは、先の二人に加えて島の旅館の若旦那で島の産物の加工に取り組む合同会社代表の本間当さん、彼らが立ち上げた資料館「島のミュージアム潤（ルビ：にま）」館長の小川ひかりさん（東北芸術工科大学卒）、山口県出身で緑のふるさと協力隊として12年来島後、島に残りデザインを通じた地域づくりをめざす松本友哉さんだ。若者は課題解決のためだけでなく、そこにしかない地域の魅力、そこでしかできない自己実現の可能性を感じて、その地を選んでいくと思う。

さらには、才能や持てるすべてをかけて島で生きる先輩の姿を見て、夢を共にしたい気持ちで、後輩が参加していく良い循環が生まれている。その中心の場が「カフェスペース しまかへ」であり、若者が働き、島民や外部者との交流拠点として、島の玄関口を活気づけている。

しまで学ぶ「自然と人との共生の原点」

いまなぜ島なのか？現代人が見失った「いのち」の感覚を取り戻すには、いのちと出会う「場」、いのちの流れを気づかせてくれる「人」、いのちのリズムに耳を澄ます「時」の流れが必要だ。その意味で、大自然と自分自身の「いのち」に出会える場が島である。自然に囲まれ、自然と対峙しなければ得れない強烈な体験を若い心に呼び覚まし、自然と向き合い生きる人びとに出会うためのかけがえのないフィールドである。

一人の学生は「島は自分の呼吸を取り戻すことのできる場所」と呼んだ。人間にとって最も大切ないのちの呼吸を取り戻す鍵が島にある。人間の都合で決められる都市的、人工的な時間ではなく、その日その日の自然の状況に行動を合わせていく。これは、発想や行動の根幹に関わる部分であり、自然と人間の共生を深いレベルから実現するために、この「いのちの流れ」を感じる時間感覚こそを、まず最初に研ぎ澄ませなければならない。それを学ぶ格好の場が島なのだ。

ぜひとも、青少年の「いのちの教育」のための拠点として、島を活用して欲しい。

地域を愛し生きる教育をめざして

現在、第六次山形県教育振興計画づくりに検討委員として参加している。議論の中で気づかされたことは「いのちを大切に」教育は、まずその子のいのちが大切にされることから始まるということ。地域を愛する人を育てるには、子どもたち、若者たちが地域に受け入れられ、地域に必要な人として大切に育てられる必要がある。

また、県外進学等を促し地域の外に価値があるという風潮を見直し、足下の地域で生きるプラスの価値を積極的に学ぶ仕組みが必要である。公益大では、1年生で基礎演習（前公益自由研究）の授業があり、私のクラスは「地域の自然と人々に出会う」がテーマ。森、田んぼ、川、島に出かけ、心からの喜びと誇りを持って自然と関わり生きる地域の先生に導かれ、その魅力に出会う。そして、2年生以降の公益社会演習や、3年生以降の専門演習で、1年生で発見した課題の解決に、地域の方々との共創プロジェクトを通して取り組む。

大切なことは、自分たちの価値観や理論を押しつけず、まず主役である住民の声を尊敬の念をもって聞くこと。それを通して、地域特有の考え方、価値観、文化的背景を知ること、当事者感覚を持って住民に寄り添いながら解決策を見いだすことができ、地域を共に創る関係が生まれていく。

かつて、柳田國男は「美しい村などというのは ありようがなくて そこに住んでいる者が 美しく住もうと思って はじめて美しい村ができるのである」と語ったという。美しく住むとは、美しく生きること。すなわち、自然や人々を愛する気持ちとその実践の中に、美しいコミュニティが生まれていく。地域をつくるとは、大人がその心を持ち続け、若者を育てていくことであると、私は思っている。



写真（上）今年度のとび魚焼干し体験合宿。NHK 番組収録のコマ。島民の皆さんとともに。



写真（右）島にUターン、協力隊として「しまかへ」を中心に活躍する若者たち